

C'n

SCENE
NEWS

CHIBA CITY MUSEUM OF ART

vol.5



千葉市美術館

江戸の天才
SO GA Shō haku
曾我蕭白展

'98年3月24日(土) - 5月5日(祝)
曾我蕭白「群仙図屏風」部分 個人蔵

曾我蕭白の笑い

怪奇で無邪気な 生き生きとした笑い

春眠暁を覚えず、というこのごろ、眼球が飛び出るような驚きを体験したい方は是非「曾我蕭白展」へ！ などというのはすしオーヴァかもしれないませんが、江戸時代にもこんな元気のいい破天荒な画家がいたことを皆様にお知らせしたくて、この展覧会を企画しました。

曾我蕭白（そがしょうはく）というのは、江戸時代も後半にさしかかった18世紀のなかごろ、上方で活躍した京都出身の画家です。当時、政治権力から離れた京都はもはや一地方都市でしかありませんでしたが、千年の「みやこ」として文化の中心に君臨した伝統の重みは、まだまだ他の追従を許しませんでした。しかしその古都にも新しい時代の波が押し寄せます。長崎を通じてもたらされた外国文化 — 中国の明清の文化と西洋の文化が、武士や商人、僧侶ら都市の知識層に大きな刺激を与えます。これを動機に絵画の分野でも、従来の伝統にない新しい表現を目指す動きが活発となりました。明治の国文学者藤岡

曾我蕭白《群仙図屏風》部分 個人蔵



作太郎は著書『近世絵画史』のなかで、この動きを「旧風革新」と呼んでいます。

「旧風革新」は当時の江戸画壇でも見られた現象でした。鈴木春信による錦絵の創案がそのよい例です。だが伝統の重圧にあえぐ京都では、その動きはより積極的なかたちをとりました。とはいってもそれは伝統を否定するのではなく、一見伝統擁護の保守派という仮面をかぶった革新、という複雑なあらわれかたをします。曾我蕭白の絵はその典型であり、最も過激な例です。

「群仙図屏風」は、蕭白の作品のなかでもとりわけ風変わりなものです。仙人たちはどれも異常な顔つきや手足をしており、人間というよりは妖怪に近い。加えてそこに書き込まれた署名の肩書きが尋常ではありません。「明太祖皇帝十四世玄孫蛇足軒祖が左近次郎暉雄入道蕭白画」—なんと自分が明の皇帝の末裔だといっているのです。なぜこんな長たらしいでたらめをかけたのでしょうか。

藤岡作太郎はさきの本のなかで、蕭白の身近にいた望月玉蟾（ぎょくせん）という画家のエピソードにふれています。あなたの絵の署名には肩書きがないと注文主から苦情をいわれた玉蟾は、おあいご用と即座にこう書きました。「大日本鍛冶宗匠三品伊賀守米金道其上町望月玉蟾」— 判じ物めいた肩書きです。「三品」とは書画の三つの格付けである「神品」「妙品」「能品」のことですが、「三一」と書いてサンピンと読めば、これは「三一奴」すなわち身分の卑しい奴（やっこ）さんのことになります。当時の世の中の空虚な権威主義を痛烈に皮肉っているわけです。蕭白の長い肩書きもこれと同じ趣向にほかなりません。

蕭白の絵は下品で汚い、という批判は、それが描かれた当時からありました。この展覧会でもそのような印象を持たれる方がいるでしょう。私さえときには蕭白の悪趣味から目をそむけたくなります。だがそれにしても、なんという剛毅で力強い悪趣味でしょう。そしてなんという不逞な笑いの精神の発露でしょう。悪趣味の権化のような「寒山拾得図」の寒山にしても、大きな口を開いてケラケラと笑っています。その口のなかには富士山が隠されている、とは横尾忠則さんの評です。

笑いを武器として権力に立ち向かう — これは亡くなられた飯沢匡氏のモットーでした。蕭白の作品に満ちている奇怪な笑い、無邪気な笑い、生き生きとした笑いを見て、私はいつもこの言葉を思いだし、よくやっておるわい、と感心するのです。

千葉市美術館 館長 辻 惟雄

蕭白のいる美術史

蕭白はいかにして忘れられたか

千葉市美術館が曾我蕭白の展覧会を開催するのに合わせて、東京大学と明治学院大学で半年ずつ蕭白を中心に講義をすることにした。題して「蕭白のいる美術史」という。

この題目は、その反対側に「蕭白のいない美術史」があることを前提にしている。事実それは存在した。もちろん蕭白は現実に18世紀、江戸時代中期に生きた画家であって、彼が歴史上実在しなかったとはだれもいいはしないが、歴史というのは記述されて初めて歴史となるのだから、あたかも蕭白などいなかったかのような記述はいくらでも可能である。たとえば、日本美術史の通史としては最も詳細な『日本美術全史』（美術出版社、1969年）は円山四条派の項の末尾に望月玉蟾（ぎょくせん）とともに彼の名前を挙げ、ふたりまとめて概括的で否定的な評価を綴る。後半を引用するなら — 「多くは奇激にすぎて、むしろ、この時代の退廃的な一面の反映とさえ、思われるものがあり、世にいれられず、わずかに孤高をほこるにすぎなかった」。この概説は、ある真理を思い出させてくれる点で教訓的である。つまり、私たちがだれかのことを忘れるのは、その人物について何も語られないからではなく、既に何度も聞いた気がする決まりきった語り口が繰り返され、そのイメージになじんでしまうためなのだ。蕭白を忘れてしまえば、日本絵画はひたすら明るく華やかな花園であるかのように思い込むこともできる。その方が日本人にとって好ましい自己像であるのかもしれない。蕭白はいかにして忘れられたか。

実のところ、江戸時代の文献で蕭白が世間に受け入れられなかったと記するものはない。それどころか、京都の文化人の人名録『平安人物志』は、1775年（安永4）版の「画家」の項に、15番目ながらも彼の名前を記載しているし、著名な学者や僧侶が彼とその作品のために詩を作ったことも明らかである。京都、伊勢、播州に遺る絵画の量と多数の贋作の存在も、彼の絵画への需要が多かったことを物語る。いったい蕭白が世に認められない不平家だったという神話はどのように生まれたのだろう。その神話が、遅くとも1890年（明治23）に形成されていることははっきりしている。前年に岡倉天心らが創刊した日本東洋美術の専門誌『国華』が、この年の正月発行の4号に掲載した、蕭白についての比較的長い解説がそれである。無署名のこの解説は、あるいは天心自身の執筆かもしれないと私は疑いもするのだが、確証はない。以下に現代語に訳しながら摘記してみよう。

何事かをなし得るすぐれた才能がありながら時世に合わないことほど、人の一生で残念極まることはない。百年前に生まれていたら天下に名をなしたはずの資質を持ちながら、むなしく

百年後の人に彼は不遇だったなあと思わせるような例は古来少なくない。曾我蕭白のごときはその最も著しい例だ — と、解説はいきなり蕭白を不遇の人に数える。蕭白が真面目を発揮した作品は、室町時代の雪舟や曾我蛇足に匹敵し、桃山・江戸初期の狩野山楽・山雪を圧倒するほどのものがあるなどと解説者は賛美しており、蕭白画の持つ一種の古風さも認識しているようだが、そこから一転して次のように語る。 — このような才能を持って室町時代に生まれ、やさしく奥ゆかしく清らかで俗気のない境遇で、すぐれた技量を伸ばしていたら、堂々と正統をもって任じ、画壇の一方を制覇しただろうに。惜しいかな、蕭白の生きた当時はこういう人物が才を伸ばすのに不適当な時期であり、古い習慣を守ってかたくなで狭量か、でなければ弱々しく他人にへつらい媚びる気風だったから、ついに彼の胸にわき起こる非凡な思いは邪道に陥り、俗事にこだわらぬ性格は奇怪へと転じ、さわやかな筆致はけわしいものに化し、醜怪を特色とする一派となってしまったのではなからうか、と。この論法の基底に江戸時代への嫌悪感を読みとるのはむつかしくない。江戸時代がここにいわれるような時代だったら、すべての才人

曾我蕭白《寒山拾得図》 拾得 京都市 興聖寺蔵（重要文化財）



は不平分子とならざるを得なかったろうが、実際はもちろんそんなことはなかった。新しい時代を作ろうとした明治の知識人は、直前の旧体制の時代であり自らがその中で育まれた近い過去を何としても否定しなかったのだらう。そのような欲望は意識されないまま、蕭白の作風の奇怪さの原因を彼の才が時流に合わなかったための屈折と解釈し、その解釈がまるで事実であるかのように記述するのである。

解説はさらに続く。先を追おう。以上のような文脈で、不遇な蕭白が世間を白眼視し、俗な絵描きたちを罵倒したのは有名だとして、『古画備考』（19世紀中頃に朝岡興禎が編んだ画家の伝記、絵画資料集）所載の記事が言及される。勝山琢舟が佐野の舟橋に欄干を描いた過ちを蕭白が批判し、口論のあげく脇差で切りかかったというエピソード。画を望むならば自分に求めよ、絵図がほしいのなら円山応挙がよかろうといていたというエピソード。これらの逸話は別の視点からの解釈も可能なのだが、解説者は蕭白の偏屈さの表れと解し、彼と池大雅との浮世離れした交遊譚をわずかに免責事項に挙げながらも、次のように断言するのだった — 蕭白のような画家が美術史上に再び出現するのはけっして好ましいことではない、と。その理由を述べるのに、将来の芸術家がどうあるべきかという観点から論じているのが、いかにも草創期の『国華』の姿勢を体現していて興味深い。つまり、蕭白の作品は1個の流星のようにほかの発達の系統を離れて1片の妖光を放つに過ぎないのだという。 — 真に大家として後世の範となる者は、世間に反対して偏執を標榜するような度量の狭い輩でなく、むしろ世の成り行きと人情との重要な点を消化し、制作の中に含め、それに従って大成するものだ。俗世間を離れた者の制作は、たとえすぐれてはいても同好の士を感化するに過ぎず、天下の万民がともにこれを楽しむことはできない。まして蕭白の偏奇な絵画のように、ことさらに世の成り行きと人情とに背くものは、とうてい美術の本旨を得たものではなく、嫌悪感を催すのみだ。画家や彫刻家であろうとする者は、単に技術の巧拙だけでなく、徳を養わねばならない。単に美術家であろうとして人であることを忘れてはいけない……

何だか新時代の美術家教育のために、蕭白が悪い見本として用いられているような気がする。実際にそういう意図がこの解説にはあったらう。これからの画家や彫刻家は、現実の社会と人間感情に基づき、国民だれもが鑑賞できる美術を作るべきである。ただ技術の巧みな工人でなく高い人格を備えた芸術家でなければならない。 — 美術の近代化を目指すこのような主張は解説の後半で明確に述べられ、蕭白はそれらの要件を満

たさない前世紀の失格者として引き合いに出される。すなわち、蕭白は、彼の在世当時も時運を得ず、明治23年の現代においても悪しき手本にしかならない、二重の意味で時流をはずれた画家と規定されるのだ。蕭白にとっての真の不遇はここから始まる。

この『国華』4号の解説が蕭白に対する固定観念を作り上げるのに果たした役割は、相当に大きかったようだ。明治年間に刊行された『国華』のうち、蕭白画を取り上げる39号（1892年）、60号（1894年）、125号（1900年）、138号（1901年）は、こぞって蕭白を「不平党」・「失意漢」と呼び、京都の人に評価されず一生を不運のうちに送ったといい、中庸を失って狂激に陥り落魄の境涯のうちに憤怒の情を絵筆に託したと述べる（118号の短い解説は例外）。1903年（明治36）に出版された藤岡作太郎の『近世絵画史』がまたこの論調を受け継いで、蕭白が復活しようとした室町時代の画風を世人は喜ばず、ために彼は「世を憤り、人を罵り、その画は怪醜を極め」と論じ、「異常の才と技とを似てして世に重視せられず、ひとり社会と相背ける美術家の心中」を憐むのだった。多くの版を重ねたこの江戸・明治絵画史の名著は、長く蕭白のイメージを固定したに違いない。高野涼堂「曾我蕭白に就て」（『日本美術』75号、1905年）は、日本美術院の雑誌記事というせいもあるだろう、やはり『国華』4号の論調に従って、「曾我蕭白は吾等の、最も排斥すべき画家の一人にして、吾等は渠（かれ）の



曾我蕭白（孔子圖）新漢市 大宝寺蔵

曾我蕭白（群仙図屏風）部分 個人蔵



画を見る度毎（たびごと）に、渠の為（た）め憐れまざるを得ず。（略）世俗の己（おのれ）を迎へざるを見て、徒（いたず）らに、人を罵り世を恨み、頑迷なる天性は益々執拗となり、遂に彼が如き鬼気に満てる処（ところ）の画を作るに至りしなり」などと書き出される。蕭白の「寒山拾得図」（興聖寺）は、1908年（明治41）に国宝（現在の重要文化財）に指定されたが、1934年（昭和9）に刊行された『日本国宝全集解説 第60輯』は、この作者を「世を呪詛する鬼」と記さずにはおかなかった。逸話と印象批評とを短絡したこのような蕭白観が以後、20世紀の前半、戦前の昭和までの雑誌記事でも支配的で、それがあの『日本美術全史』の叙述をも形成したのである。

さて、1960年代末ころから辻惟雄、松尾勝彦（冷泉為人）、マニー・ヒックマン氏らによって、蕭白の伝記と作品についての実証的な研究が開始され、いまに至るまで種々の論考と展覧会は積み重なり、彼への評価はずっと高まった。蕭白に対する明治以降の偏見を凝縮したかに思える『日本美術全史』の記事に較べれば、現在記述される日本美術史は、はるかに寛大に蕭白に居場所を分け与えているといえる。作家別の全集が企画される時、彼に1冊が割り当てられるのも珍しくない。けれども、彼がいまほんとうに美術史で存在が認められているかは別問題である。たとえば、最新の日本美術全集である講談社版の第19巻『大雅と応挙』（1993年）のうち「若冲・蕭白・蘆雪」の部は、蕭白の絵画をカラー図版に掲げるのに、なぜ大画面の荒々

しいタッチの水墨画3件だけを選んでいるのだろうか。これが、彼の作域を限定して提示し、よりよい作品選定とレイアウトを避け、この3人の画家の仕事が大雅や応挙ほど魅力的に見えないようにするための無意識の配慮でなければ幸いである。また、最新の日本美術史の通史として読むこともできる『日本美術館』（小学館、1997年）の中で、蕭白はここでも若冲、蘆雪といっしょに、そして白隠、仙厓、円空、木喰らとともに、江戸時代の「奇想の美」という章に収められている。流派に分類できない個性的な作家たちがこうしてまとめられることに意義はある。しかし、このような構成は、結局、「琳派」、「浮世絵」、「文人画」、「円山四条派」、「洋風画」などの諸流派の末尾に「その他」として彼らを一括する、従来の江戸時代美術史の枠組みの一変種でしかないのではないか。系統立てて発展したいいくつかの流れとは無関係に風変わりな個性が存在したかのような章立ては、「一個ノ流星ノ如ク他ノ発達ノ系統ヲ離レ一片ノ妖光ヲ放ツ」に過ぎない画家として蕭白をとらえた『国華』4号の解説とどれだけの違いがあるだろう。

蕭白はどこにいるのか。彼はたとえば大雅のそばにいた。ふたりの親交は、安西雲煙の『近世名家書画談』（1830年）が伝える逸話によって語られるのが普通であり、狷介な蕭白すら心を許す大雅の度量が賞賛されたりもするが、同時代に京都に生きたふたりの画家の関係は、それぞれの作品に即して探究する価値のある問題だろう。その意味で、先に触れた『日本国宝全集解説』が、蕭白は「大雅が南宗に属しながらも北宗的筆法を自家薬籠中のものとして仙骨を吐露し尽くした点に知己を求めたのであらう」と解釈しているのは注意を引く。ここでいわれる南宗画・北宗画というあまりにおおざっぱな様式分類は、もはや日本美術史の研究で用いるべきでない私は思うのだが、ともかく解説者が、大雅のレパトリーでは柔らかなタッチの点や線を集積する墨画淡彩の手法ばかりでなく、墨の面で大づかみに形象を表す、あるいは岩絵具と金泥で濃彩の画面を作る試みも重要な位置を占めていたことを正しく認識し、そこに蕭

白の共感を想定したのは評価できる。さらに一步を進めて、蕭白と大雅の志向するところが案外に近いことを確認できるなら、彼らの了解し合う「画」の世界とはおよそ異質な「絵図」のごとき何物かによってその世界に亀裂をもたらした、応挙というひとつの事件の意義を、蕭白自身正確に理解していた、と彼の言葉を解釈することも可能かもしれない。千葉市美術館の蕭白展が、こういう課題も含めて彼のために美術史を書き直す新たな契機となることを楽しみにしている。

（東京大学文学部助教授 佐藤康宏）



曾我蕭白（龍圖） 天津市 石山寺藏



市民ギャラリーご利用の案内

9階の市民ギャラリーは、市内で活動する美術団体の方々に作品を発表していただくスペースです。



市民ギャラリーは①・②・③の三室に分かれ、それぞれが絵画をはじめとして、彫刻や工芸、写真など多様な展示に対応しています。

また、三室を合わせ、ひとつの大きな空間として利用することが出来ます。

4月1日(水)より6月30日(火)まで1998年10月から翌99年3月までの利用を受け付けます(ただし、99年1月11～25日および1月29～3月12日の期間は第41回千葉市児童生徒総合作品展覧会と第30回千葉市民美術展の準備・開催のため一般の方はご利用できません)。

【利用時間】 10:00～18:00 (金曜日のみ20:00まで)

【休館日】 月曜日及び年末年始

※ご利用の際の手続きなど、詳しくは美術館までお問い合わせください。

| 展示室 | 床面積 | 壁面延長 | 壁面高 |
|----------|--------|-------|------|
| 市民ギャラリー① | 162.0㎡ | 49.0m | 3.0m |
| 市民ギャラリー② | 136.7㎡ | 37.6m | 3.0m |
| 市民ギャラリー③ | 162.0㎡ | 49.0m | 3.0m |

「友の会」ご入会の案内

企画展・常設展の入場はフリー、図書の特典などの特典がございます。是非ご利用ください。

〈入会金〉

- 一般会員..... 1,000円
- 学生会員(高・専・大)..... 500円
- ファミリー会員(大人2名と中学生以下の家族)..... 2,000円

〈年会費〉

- 一般会員..... 3,000円
- 学生会員(高・専・大)..... 1,500円
- ファミリー会員(大人2名と中学生以下の家族)..... 6,000円

【入会のお申込み】

- 美術館受付に備えてある「入会申込み書」を利用し、お申し込みください。
 - 休館日(臨時を含む)や年末年始は、お申し込みできません。
- ※詳細は、千葉市美術館(TEL 043-221-2311)までお問い合わせください。

ミュージアムグッズの紹介

ミュージアムグッズ — 蕭白のグリーティングカード

5月5日まで開催中の「江戸の鬼才 曾我蕭白展」にも出品されている本館所蔵の「獅子虎図」に描かれている虎をあしらったグリーティングカードを発売中です(一枚150円)。ミュージアムショップにてお求めください。



展覧会スケジュール

[休館日] 月曜日（祝日の場合はその翌日）年末年始 展示替期間中
 [開館時間] 午前10時～午後6時（入場は午後5時30分まで）毎週金曜日は午後8時まで（入場は午後7時30分まで）
 [ハローダイヤル] 043-227-8600



江戸の鬼才 曾我蕭白展

3月24日(火)～5月5日(火・祝)

奇想の画家として知られ、18世紀の京都画壇を代表する異才として近年ますます評価の高い曾我蕭白（享保15・1730年～安永10・1781年）。その生涯にわたる画業をふりかえる展覧会です。アメリカ国内5ヵ所より里帰りした名品11点をはじめ、国内の代表的大作や新出の作品など、約80点で構成する、奔放で雄渾な蕭白の世界をお楽しみください。

◀曾我蕭白 《寒山拾得図屏風》 拾得 個人蔵



菅木志雄展

5月12日(火)～6月14日(日)

◀菅木志雄 《景間律》 1994年
 セメントブロック・木・板・ペイント
 75.0×400.0×420.0cm
 千葉市美術館蔵

菅木志雄（1944年生まれ）は戦後のわが国を象徴する美術動向である「もの派」を代表する作家のひとりとして1960年代後半から現在にいたるまで第一線で活躍しています。近年、氏の作品は茶室や庭といった日本の伝統的な空間の美学からも強い関心が寄せられるようになり、同時代の国際的なアート・シーンのみならず過去の豊かな遺産を包含したものとして高く評価されています。今回の本館での展示は昨年12月より始まった全国巡回展のしめくりとして、他館未出品の作品や新作を含む約50点から構成された回顧展形式によってこのたぐい希なアーティストのあゆみを紹介しようとするものです。



東山魁夷展

6月27日(土)～8月2日(日)

静謐な風景画を多く描き、現代の日本画壇で広く知られている東山魁夷（1908年生まれ）。本展は、氏の画業の確立期ともいえるべき1945～60年に焦点を当てるものです。この期間の代表的作品を網羅するとともに関連作を展示。また、新たに発掘された戦前の初期作品もあわせて紹介します。戦後における日本画のあり方を静かに、しかも大きく転換させた作品群約110点によって構成された本展は氏のひとがらそのまますを反映したものと申せましょう。

◀東山魁夷 《たにま》 1953年
 絹本彩色 134.0×107.4cm
 東京国立近代美術館蔵

■展覧会の日程・名称は変更される場合があります。なお、企画展の入場料は展覧会ごとに異なります。詳しくは美術館までお問い合わせください。

美術館の所蔵作品より



曾我蕭白
《寿老人図》
千葉市美術館蔵

妙に長い頭と白いあごひげのおじいさん。これは七福神の誰かだ、とまではすぐにおわかりになるでしょう。お正月になると思い出す(某フィルム会社のテレビコマーシャルなど)七福神は、大黒天・恵比寿・毘沙門天・弁財天・福祿寿・寿老人・布袋です。日本では江戸時代中頃から七福神信仰が盛んになりました。今でも七福神巡りはすたれていません。この中で福祿寿と寿老人はもとと同じ神です。南極星(中国で人間の寿命をつかさどるといわれた)の化身、寿老人(寿)にコウモリ(蝙蝠=蝠の音が福に通じる)と、鹿(鹿の音が禄に通じる)を添えて福祿寿といったのが、いつのまにか別々の神になりました。

さて、この絵は寿老人か福祿寿かということですが、とりあえず鹿はいるがコウモリはいないようです。寿老人と福祿寿が一枚の絵に描いてあるとき、頭巾を被り、杖と巻物を持っているのはたいてい寿老人なので、寿老人としておきます。長い頭はどちらかという福祿寿の特徴なので、描いている方も混同しているのかもしれませんが。寿老人と白い鹿で十分めでたいうえに、松竹梅、「鶴は千年、亀は万年」の鶴亀、万年茸(靈芝)まで描き込んでありますので、おめでたいことこの上なしといえます。

この絵の作者曾我蕭白は、若い頃に地方を巡って、一目見たら忘れられない奇抜な絵をたくさん描きました。彼の絵としてはこの作品はかなりおとなしい方です。絵を買ってくれる人がいてこそこの画家という職業ですから、普通の絵も描いたのでしょう。この絵の岩や梅の木の幹の細かくかちちりと描き込む画風は40代頃のもので、そのころには彼も京都の町に落ちついて、弟子もいたようです。

よく見ると神様というには、ちょっと品がないお顔だし、肘掛けがわりにされた鹿はいやそうな顔をしているようにみえます。そこの作者曾我蕭白らしいなあ、面白いなあとは思いますが皆様はいかがでしょうか。約200年前にこの絵を蕭白に描かせた人は満足したのでしょうか? この絵は絵の具を使っているの、注文主は墨だけのものにくらべて高いお金を払ったはずで

◎この作品は春季特別展「曾我蕭白」(3月24日~5月5日)の全期間展示いたします。
(本館学芸員 伊藤紫織)

美術館ご利用あんない

1-2階 SAYA-DO HALL

さや堂ホール
昭和初期に建設された、市内に残る数少ない貴重な建物(ネオ・ルネサンス様式)を新しい建物で包み込み、復元・保存したものです。

1階 MUSEUM SHOP

ミュージアム・ショップ
展覧会カタログ・美術図書、ミュージアムグッズがお求めになれます。

7階 AV CORNER

映像コーナー
ハイビジョンによる作品鑑賞、所蔵作品の検索ができます。また、千葉市美術館制作の番組をご覧頂けます。

10階 ART LIBRARY

図書室
室内の美術図書はご自由にご覧になれます。また、美術書の検索に関するご相談をうけたまわります。
[開室時間] 10:00~18:00

11階 RESTAURANT

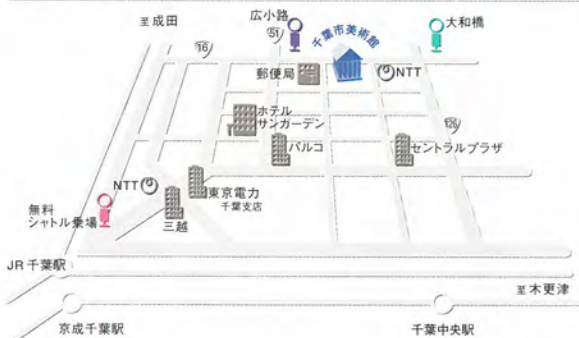
レストラン
ランチタイム・喫茶にご利用下さい。
[営業時間] 11:00~18:00

●JR東日本千葉駅利用

▲東口より徒歩15分 京成バス大学病院行(のりば⑦)「大和橋」下車徒歩2分
▲京成バス矢作台市営住宅・川戸行(のりば⑦)または小湊バス八幡宿駅行(のりば④)「広小路」下車徒歩1分 無料巡回シャトルバス・チーバス(のりば⑯)「中央区役所・美術館前」下車11:00~18:00の毎時05分と35分に発車(水曜日運休)

●京成電鉄千葉中央駅利用

▲東口より徒歩約10分



〒260-8733 千葉県千葉市中央区中央3-10-8 発行日:1998年3月31日
TEL. 043-221-2311 FAX. 043-221-2316
[ご案内]NTTハローダイヤル 043-227-8600
Publication: 3-10-8 Chuo, Chuo-ku, Chiba city, Chiba pref. Japan zip.260-8733
制作・印刷: 機翠松堂